

自然からの 伝言

奥会津



かつて 神話は生きていた。
人間は自然の一部であるとの認識が
確かに存在した時代。
人々は自然が語る言葉を聴くことができた。

第一章

山浦芳明

太古からの
時の刻み

天地万物自ら然り……………24

川と水の営み……………28

虚飾のない装い……………30

自然が刻む時間……………32

農耕のリズム……………34

それぞれの時の交叉……………36

コラム

角田伊一……………40

河岸段丘とカルデラ湖

飯塚恒夫……………42

特別豪雪地帯

河村宗郎……………44

寄稿

奥会津早春紀行

立松和平……………46

第二章

自然が
語る言葉

雲のことは……………49

山のことは……………50

森のことは……………52

木のことは……………54

水のことは……………56

風のことば……………58

棲むものたちのことば……………60

山の中の動物たち 談・広野 毅……………62

コラム

佐治 靖……………66

山の信仰

角田伊一……………68

蟻と蝶とのいい関係

角田伊一……………69

フォト&ルポ

たかが虫けらさねと虫けら 角田伊一……………70

写真・平田春男

文・庄司 契……………70

第三章

知の
みなもと

二瓶 厚

森に学ぶ……………84

森林のはたらき……………86

植物に学ぶ……………90

雑草……………92

地球のダム……………94

エネルギーの流れ（巡る輪廻の底流にあるもの）……………96

持続可能な文明……………100

コラム

小柴 拓……………102

宇宙知

片野 篤……………104

極相のブナ林

松崎憲三……………106

草木供養塔

第四章

青山あり

山浦芳明

森の小さな命……………110

死を抱えて生きる巨木……………112

再生へのゆるやかな歩み……………114

新たなる生命へ……………116

野山抄

森田 萌

一、天恵の樹……………31

二、鳥と友達……………39

三、花のふるさと……………89

四、宝石箱……………93

五、杉の木……………115

自然の手帖

アワガタケスマレ……………35

予兆……………38

冬

凜冽とした冬の寒気が訪れると、奥会津は一夜にして、白き神々の舞う、モノトーンの世界へと変貌する。白く荒ら振る神々の舞の裳裾のはためきのように、来る日も、来る日もやむことも無く降りしきる雪また雪。

山嶺も、
野も、田も畑も、家も、
深い白銀のなかに
ひっそりと
息をひそめる。
やがてくる
芽生えの春の
生命を育みながら。



かんじきの足跡・只見町

白き神々
プロローグ



雪の滝谷川・柳津町

溪谷は、まだ白く深い眠りの季節を刻む。
雪の晴れ間にのぞく陽の光りが、
眩しくひかる。
荒ち振る白き神々の
一瞬のほほ笑みか。